
II 調査結果の概要

1 保護者の生活状況

経済的な状況について、等価世帯収入の水準により分類したところ、「中央値の2分の1未満」に該当するのは小学生世帯で 10.7%、中学生世帯で 11.1%、高校生世帯で 9.7%、「中央値の2分の1以上中央値未満」に該当するのは、小学生世帯で 34.0%、中学生世帯で 36.0%、高校生世帯で 31.8%となっている。親の婚姻状況から世帯の状況を分類したところ、「ひとり親世帯」は小学生世帯で 13.8%、中学生世帯で 14.1%、高校生世帯で 13.5%となっている。等価世帯収入の水準には、世帯の状況や親の最終学歴、就労状況等が影響しており、「ひとり親世帯」や親の学歴が低い場合、正社員でない場合では等価世帯収入の水準が低くなる傾向がみられる。

現在の暮らしの状況について、「中央値の2分の1未満」の世帯や「ひとり親世帯」では『苦しい』との回答が5割以上となっており、「中央値以上」や「ふたり親世帯」と比べて大きな差がみられる。また、収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では、食料や衣服を買えなかったことや公共料金の未払いになったことがある割合が高くなっており、子どもの進学のために経済的な準備についても、「余裕がないのでできない」が高くなっている。

子どもが進むと思う進学先については、収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では『大学またはそれ以上』を希望する割合が低くなっている。

保護者の悩みごとについては、「収入・家計・借金等」が最も高く、次いで「子どもの教育」、「自分や家族の仕事」などの順となっている。

保護者の心身の健康状態について、収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では、「うつ・不安障害相当」と考えられる割合や保護者自身の健康状態で『よくない』と回答する割合が高くなっており、生活に対する満足度については低くなっている。

2 子どもの生活状況

学習の状況について、等価世帯収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では、「塾で勉強する」の割合が低く、1日あたりの勉強時間もやや短くなる傾向がみられており、教育段階が上がるほどその傾向が顕著にみられる。学校の授業の理解度についても、収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では『わからない』の回答が高くなっている。

進学希望について、『大学またはそれ以上』との回答は、等価世帯収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」ほど低くなっている。

部活動等への参加状況は、国や広島県に比べて、「参加していない」の割合が高く、等価世帯収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」ほど「参加していない」の割合が高くなる傾向がみられる。

日常的な生活の状況について、等価世帯収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では、毎日朝食を食べている割合や平日同じ時間に寝ている割合が低くなっている。学校生活の状況についても、等価世帯収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では、欠席や遅刻・早退をする割合が高くなっており、「宿題や課題ができていないことが多い」や「提出しなければいけない書類などの提出が遅れることが多い」等の回答割合も高くなる傾向がみられる。

ヤングケアラーの実態について、家族のお世話をしている割合は、全体で 5~12%程度となっており、国に比べて若干高くなっているが、お世話によりきつきを感じているかについては、「特にきつきは感じてない」が大半を占めている。

悩みごとについては、「学業成績について」や「進路について」との回答が高く、中学生・高校生においては、収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」ほど、その回答割合が高くなる傾向がみられる。

子どもの心理的な状況について、収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では、「情緒の問題」や「仲間関係の問題」のスコアが高くなる傾向がみられる。また、生活満足度について、等価世帯収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」ではやや低くなる傾向がみられるものの、保護者ほど収入や世帯の状況による生活満足度の差はみられない。

3 支援の利用状況や効果等

保護者の支援制度の利用状況について、等価世帯収入の水準が「中央値の2分の1未満」の世帯や「ひとり親世帯」では、「就学援助」や「児童扶養手当」は比較的に利用されているものの、「生活保護」、「生活困窮者の自立支援相談窓口」、「三次市子育て支援課相談室」の利用は1割未満となっている。

保護者が利用している情報媒体について、等価世帯収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では、「広報みよし」や「三次市公式 SNS」の回答割合が低くなる傾向がみられ、一方で「市役所窓口」との回答割合は高くなる傾向がみられる。

保護者が重要だと思う施策については、「子どもの就学にかかる費用が軽減されること」や「子どもが受けられる無料(低額)の学習支援制度」が高くなっており、等価世帯収入の水準が低い世帯や「ひとり親世帯」では、「離婚のことや養育費のことなどについて専門的な支援が受けられること」や「住宅を探したり住宅費を軽減したりするための支援が受けられること」、「ひとり親家庭への相談・支援が受けられること」等も高くなっている。

子どもの居場所の利用状況について、「平日の夜や休日を過ごすことができる場所」は、5割前後の子どもが利用しており、国や広島県と比較しても高くなっており、利用による変化として、小学生では「友だちが増えた」、中学生・高校生では「勉強する時間が増えた」が高くなっている。また、「勉強を無料でみってくれる場所」については、利用している子どもは1割未満だが、「あれば利用したいと思う」は約4～5割となっている。

子どもが三次市の取組で力を入れてほしいと思うことについては、「子どもの就学にかかる費用が軽減されること」や「無料(低額)の学習支援制度があること」、「子どもが楽しめる体験活動などの機会や場所が提供されること」が高くなっている。

4 総括(求められる支援や今後の課題)

【課題①生活が苦しいと感じている世帯が多い】

三次市では、等価世帯収入の中央値が275万円と国(317.54万円)や広島県(290.69万円)と比べて低く、「中央値の2分の1未満」の割合では大きな差はみられないが、全体的に収入の低い世帯が多くなっており、暮らしの状況では「苦しい」と回答した割合が国や広島県と比べて高くなっている。保護者が重要だと思う施策では、「子どもの就学にかかる費用が軽減されること」や「子どもが受けられる無料(低額)の学習支援制度」と金銭的な支援の回答が上位を占めており、より手厚い支援が求められている。

【課題②貧困の影響は経済的な課題に留まらない】

本調査においては、保護者の経済状況や婚姻状況により生活実態をみてきたが、保護者の貧困は経済的な課題に留まらず、子どもの学習状況、生活習慣や体験活動、心理的側面にも影響があることが分かっ

た。貧困層やひとり親世帯ほど、子どもの勉強時間が短く、授業の理解が浅くて、大学への進学希望者が少なくなっている。貧困層やひとり親世帯では、朝食を毎日食べる習慣や規則正しい睡眠習慣が身につけている子どもがその他の層やふたり親世帯の子どもに比べて少なく、学校の出席状況や宿題・課題等の取り組み状況にも差がみられた。また、地域のスポーツ・文化活動や学校の部活動等に参加していない子どもが多くなっている。心理的な側面では、貧困層やひとり親世帯ほど「情緒の問題」や「仲間関係の問題」のスコアが高くなる傾向がみられる。

これらの通り、保護者の経済状況や婚姻状況によって、子どもは学習状況や生活習慣、体験活動、心理的側面など、様々な範囲で影響を受けているということが明らかとなった。そのため、困窮や世帯の状況等により、保護者が課題を抱えている場合には、金銭的な支援だけでなく多様な範囲で子どもへの支援が必要である。

【課題③悩みがあっても相談できない人がいる】

困っているときに相談できる人について、子どもに尋ねたところ、小学生で 5.9%、中学生で 11.2%、高校生で 5.4%が「誰にも相談できない、相談したくない」と回答している。保護者についても、子育てに関する相談で頼れる人について、小学生の保護者で 4.9%、中学生の保護者で 5.7%、高校生の保護者で 5.8%が「いない」と回答している。

これらの相談できる人の有無で生活満足度をみると、相談できる人がいない場合、相談できる人がいる人に比べて、生活満足度の平均点が低くなっている。特に保護者においてその傾向が顕著で、貧困層やひとり親世帯の生活満足度の平均と比べても低くなっていることが分かった。

近年、子どもの貧困をはじめとし、いじめ・不登校・虐待・障害・ヤングケアラーなど、子育て世帯を取り巻く環境においては様々な課題が顕在化してきており、個人が抱える課題も複雑化している。子どもや子育てを行う保護者が課題を抱え込んで孤独になってしまわないように、相談できる体制づくりを進めていく必要がある。